BOOK 書評 review

榧野　潤　独立行政法人 労働政策研究・研修機構　職業相談・就職支援研究担当 副主任研究員

廣川　進著

失業のキャリアカウンセリング

再就職支援の現場から

■Ａ５判　230頁
■定価3,570円（税込）
■2006年６月刊
金剛出版

この本は、キャリアカウンセリングを勉強し始めた方から、実際に現場でキャリアカウンセリングをされている方、さらには自分自身が人生の転機や危機にある方を対象としており、そういった方々に具体的で現実的に活かせるヒントを提供することをねらいとしている。

実際に、キャリアカウンセリングやキャリアの危機に関する様々な研究の紹介とともに、面接調査や事例研究の結果や、巻末には著者自身がキャリアの危機を脱した経験が書かれてあるなど、キャリアカウンセリングの現場や現実の生活で役立つようなアイディアやヒントがぎっしりと詰まっている。

この本は、そういった意味でキャリアカウンセリングのよい手引きと言えるが、それだけではない。筆者のキャリアカウンセリングに関する主張がしっかりとなされているのである。それは、失業という経験を人生の転機・危機と捉え、転機・危機のカウンセリングはキャリアとメンタルの両方を見極めつつ行わなければならない、ということである。よって、心理面でのケアができるキャリアカウンセラーの養成が大切であり、失業者のメンタルヘルス対策やカウンセリングの事例研究など、臨床心理学の「個の視点」からの地道なアプローチが今、求められているという。

この「個の視点」からのアプローチとは、失業を「重大な対象の喪失」と捉え、それによる人生の転機・危機の「語り」を聴くことで心理的援助を行うことである。

では、その危機とは何だろうか？　それはアイデンティティの危機であるという。このことは、リストラで失業した人たちを対象とした面接調査から明らかにされる。具体的には、「長年親しんだ会社を離れ、組織から否定されたような気持ちを抱きながらアイデンティティが揺らいでいる」ことであり、「過去・現在・未来に対する否定的な認知を余儀なくされる」ことである。

つまり、失業は人生の転機・危機であり、その問題はアイデンティティの危機にある。失業者はその転機・危機を語ることにより、アイデンティティの危機を脱することができる。

著者のこういった考え方を理解して、事例研究をまとめた実践編を読むと、とても興味深い。カウンセラーである著者が現場で試行錯誤しながら、自分自身のキャリアカウンセリングの技術や考え方を検討していく過程が伝わってくるからである。

例えば第９章の事例Ａでは、面接の逐語記録とともに、著者がクライエントの思考や行動の傾向を把握していく過程が説明される。著者がクライエントの左遷という経験を挫折と捉え、クライエントに伝えるが、挫折ではないと否定される。それを心の平静を保つためのクライエントの防衛であると解釈し、深く追求することを止める。こういったキャリアカウンセリングの過程におけるカウンセラーの心の動きがざっくばらんに書かれてあり、とても参考になる。

また、実践編には現場で役に立つ知識がたくさん書かれてある。例えば、第９章の「キャリアカウンセラーが対応に苦慮するケース」では、メンタル疾患を抱えるクライエントに関するトラブルの事例が説明され、そういったトラブルへの組織の対応が６つにまとめられている。それらは、①担当者が一人で抱えない、②迅速な対応を取る、③精神科医療の専門家、場合によっては弁護士などにケース対応の相談ができるネットワークを作る、④トラブルの内容・程度によっては、対応窓口を担当者に代えて、上司などにする、⑤組織の側がチームとして一丸となって同じ対応をする、⑥クライエントの得意なコミュニケーションのチャンネルに乗らない、であり、まさに現場ですぐに使える知識と言えよう。

実践編の事例のなかで使われた様々な手法は、第10章で、①傾聴、②語りを聴く、③自分史年表、④イメージの力、⑤学習、⑥アセスメントにまとめられており、第11章の「リフレーミング」を加えると７つになる。私はこれら７つの手法が現場において関連性を持ちながら実践されていると思った。また、著者のキャリアカウンセリングの考え方と密接に関係しているはずであり、無いものねだりかもしれないが、それらの説明があればよかったと思う。

この本のなかでも特に実践編は読み応えがある。著者は、今の日本のキャリアカウンセリングにとって必要なのは理論だけでなく、技術のレベルの検討であると強調する。実践編を読めば、技術のレベルでの検討とはどういうことかが具体的にわかるだろう。